

厚生労働科学研究  
(子ども家庭総合研究事業)

思春期の保健対策の強化及び  
健康教育の推進に関する研究

平成14年度研究報告書

平成15年3月

主任研究者 望月 友美子

## 目 次

### I. 総括研究報告書

「思春期保健推進のための情報通信技術（IT）を利用した新たな健康教育手法の開発と評価」

望月友美子 ..... 5  
（資料1）大いなる移行期新しい世紀に向けた青年の育成（翻訳）

### II. 分担研究報告書

1. 「思春期外来（相談窓口）の量と質の向上に関する研究」

望月友美子・加藤則子 ..... 67

2. 「思春期の心理的問題へのコミュニティアプローチー心理教育的予防プログラム作成に向けてー」

井上孝代・飯田敏晴・益子洋人・井上知子・巖岩奈々・菊池陽子 ..... 83

3. 「ホームページを使ったライフスキル教育」

今成知美 ..... 201

4. 「思春期支援の施策と現状および指標にみる今後の課題ー飲酒・喫煙・薬物を中心にー」

福島富士子 ..... 211

平成14年度厚生労働科学研究費補助金（子ども家庭総合研究事業）

「思春期の保健対策の強化及び健康教育の推進に関する研究」

研究報告書

「思春期保健推進のための情報通信技術（IT）を利用した新たな健康教育手法の開発と評価」

主任研究者 望月友美子 国立保健医療科学院研究情報センター

研究要旨

我が国の思春期保健対策の推進のために、必要な基盤整備として、情報通信技術を利用した新しい健康教育手法としてウェブサイトを開発した。米国における情報・政策・人材を柱に、思春期の子ども達の心身と社会における諸問題を解決しようとする包括的な取り組みと比べて、我が国の思春期保健対策は限られた専門領域に偏っており、今後は学際的な各専門分野との連携を重視し、成育医療の一環としても取り組まれる必要がある。当面は本ウェブサイトが健康情報基地として、思春期の子ども達や関係者のニーズと現実のギャップを埋める役割が期待される。

A. 研究目的

思春期保健の諸問題の解決のために、健康教育や保健対策の量的拡大と質的転換が望まれている。本研究では、「健やか親子 21」と連動したウェブサイトを新たに開設し、特に情報リテラシーの観点から、思春期保健に関わる様々な当事者の多様な関心と能力に個別に対応した「自己学習型」の健康教育手法を開発する。思春期に達した子ども達のみならず、思春期前の子ども達にもプログラムを提供することにより、子ども達が正しい情報を選択し、自己決定できる能力の向上が期待される。さらに、教職員や保健医療従事者、父母など、子ども達を取り巻く当事者としての大人向けにもプログラムを提供することにより、思春期保健の諸問題への社会全体の理解が深められる。

思春期保健に関連した的確な情報提供と健康教育の場を提供するほかに、インターネットの特性を生かした双方向のコミュニケーションの場を提供することにより、利用者の評価をコンテンツに即時に反映させることができ、また、関連する文献レビューやグループワークによる

成果物も反映させることにより、コンテンツの充実と発展を図ることができる。さらに、コンテンツはCD-ROMやDVDとしても二次利用できるので、従来の教育教材の開発に比べて、はるかに効率良く最新の内容の教育教材を作成できる。

本研究を思春期保健に関する「自己学習型」の健康教育手法の開発研究事業として継続することにより、思春期保健の問題解決のためのプラットフォーム形成のみならず、国民の健康水準向上のための自己決定の支援と社会環境の整備に寄与し、「健やか親子 21」における思春期保健対策の強化と健康教育推進のための2010年までの各目標を達成することを目的とした。

B/C. 研究方法と結果

(1) 学術雑誌における思春期保健のテーマのレビュー

平成13年度の研究において、米国では思春期問題を幅広く網羅するような様々な情報提供が行われていることが分かった。我が国でそれを実践する場合に、学術研究は重要な根拠となり

うると考え、既存の学術雑誌（日本思春期学会誌）における原著論文がどのような課題をテーマにしているか、過去に遡って検索した。

結果は、1982年～2001年に同誌に掲載された原著論文451報中、発育・発達に関するテーマが最も多く（153）、次に、性（妊娠を含む）（124）、精神（88）、ダイエット・節食障害（32）、検査法（22）、親子関係（17）、性感染症（8）、遺伝（5）、喫煙・飲酒・薬物（1）、暴力（1）であった。思春期に広く蔓延している問題である喫煙や飲酒が少ないのは、思春期学会員の構成にもよるのであろうが、会員の専門分野のかたよりと研究内容のかたよりが新たに確認された。

この結果は、思春期の子供達の身体に悪影響を及ぼす喫煙・飲酒・薬物等の問題を、思春期の専門家に充分理解してもらい、研究や実践活動にも一層取り入れることの必要性を示唆するものであり、思春期学会員における未開拓分野として、重点的な取り組みが望まれる。

## （2） ホームページの改訂

昨年度のテスト版として開発したホームページは、主として10代の女子を対象としたが、今年度は男女を共通の対象とするデザインと内容に改訂した。その過程で、グループインタビューならびにヒアリングにより、「思春期」あるいは「思春期外来」という用語がその時期にある子供達にとって受け入れやすいか、という問題点が指摘された。事実、学術用語としては定義もされているが、実際には思春期は個人によって幅があり、また一般的な用語とも言いがたい。よって、本研究では、敢えて「十代」(Teens)とくくることで、対象に迫ることにした。

メインページのデザインは、男女を模式的に配置し、本ホームページがテーマとする情報の柱に容易にアクセスできるようにした。例えば、「ダイエットと美容」、「スポーツとからだ」、「SEX、男性、女性」、「薬物、たばこ」、「こころの悩み」である。個々の情報は、十代の子供達の様々な疑問にQ&A形式で答える形で提供

する。

また、あらかじめ用意した情報のみならず、十代の子供達の先輩に相当する「Big Brothers、Big Sisters」が悩みに答える相談コーナーも設け、双方向のコミュニケーションをはかる。ただし、回答はカウンセリング専門家の指導の下、大学生と大学院生の複数のメンバーによるチームで行われ、1問1答の1往復のみとする。このコーナーの設置によって、既存の調査研究では把握しきれない、十代の子供達の生の声が聴取できるとともに、回答者の資質向上にもつながる。

## D. まとめ

我が国の思春期保健は主として、産婦人科医が中心になり、その他少数の泌尿器科医や精神科医が取り組んできたと言えるが、思春期に起こる心身や社会的な様々な問題に対処することは資源と時間の制約の中で、非常に困難であると思われる。思春期外来の量的充実はもとより、学際的な専門家を養成し、小児科領域への拡大が望まれる。当面は、本ウェブサイトが総合的な情報基地としてニーズとのギャップを埋める必要があり、求められる役割は大きいと考える。

さらに、米国の思春期保健の専門家との連携が一層望まれるとともに、我が国の国立成育医療センターのような公的機関の中核拠点としての整備が必要である。

## E. 結論

我が国の思春期保健の内容や専門家は、限られたテーマに偏重しており、包括的に思春期の問題を解決するための情報発信や人材育成などの基盤整備が必要である。そのためにも、諸外国の対策を参考に、思春期保健対策の政策評価が緊急の課題である。

# 大いなる移行期

## GREAT TRANSITIONS

新しい世紀に向けた青年の育成

簡略版

カーネギー青年育成評議会  
ニューヨーク・カーネギー財団 1996年3月

(仮訳 国立保健医療科学院 望月友美子)

## 目次

|                           |    |
|---------------------------|----|
| はじめに                      | 9  |
| 第Ⅰ部 大いなる移行期               | 12 |
| 第1章 青年期初期：非常に重要な転換期       | 13 |
| 第2章 新しい環境における古い生物学        | 20 |
| 第Ⅱ部 新しい世紀に向けた青年の育成        | 27 |
| 第3章 家族と青年期の子供との新しい絆       | 28 |
| 第4章 社会の変化に即した青少年の教育       | 34 |
| 第5章 青年の健康を増進する            | 40 |
| 第6章 青年と地域社会との関係強化         | 45 |
| 第7章 メディアの情報普及力を正しい方向に活用する | 51 |
| 第8章 青年期初期の若者に対する責任の共有     | 55 |

## はじめに

アメリカの青年の多くは、10歳から18歳という人生において重要な移行期を無難に乗り越えている。健全な学校教育、家族の支え、そして地域社会の温かい指導を得て、青年たちは、技術化の進んだ民主社会における、家庭生活、友人関係、職場、さらに市民生活に必要な役割を習得する。若者の大半は、困難な状況に置かれても、責任感と倫理観を備え、問題解決能力を持った大人へと成長していく。しかしその一方で、大人への成長過程で障壁にぶつかったことで心身の健康を損ね、成功への意欲だけでなくその能力までも失い、人間関係に支障をきたしてしまう若者もいる。青年の4人に1人以上が、自分の健康や将来を脅かす危険な行為にのめり込むリスクが高い。

大人への移行期を無難に乗り越えている様子の青年たち、そして若干14歳か15歳で将来への選択肢を失ってしまう青年たち。カーネギー青年育成評議会は、そのどちらに対しても早急な対策が必要だと考えている。ニューヨーク・カーネギー財団により1986年に設立されたこの評議会は、教育、法律、科学、健康、宗教、企業、メディア、若者の問題を取り扱う機関、政府など各界のトップリーダーで構成され、カーネギー財団の名誉会長であるデビッド A. ハンブルグが議長を務めている。過去10年間、この評議会は、青年期の問題を国家にとって重要な政策課題とすることをその使命とした。専門調査会、作業委員会、会議およびセミナー、委託研究およびその報告などの活動を通じ、評議会は、米国の青年についてのできる限りの知識と見識を集め、家族や他の重要な影響力を持つ機関が、若者の健全な成長に必要な人間的側面からの要求に応えるにはどうすればいいかを検証し、さらに、青少年が立派に成人するための道筋を示すべく、実践的な方策の考案に努めてきた。

「大いなる移行期：新しい世紀に向けた青年の育成」は、カーネギー評議会とその活動実績についてまとめた最終報告である。この報告書では、社会政策に関する本評議会の三大レポートである *Turning Points: Preparing Youth for the 21<sup>st</sup> Century* (1989年)、*Fateful Choices: Healthy Youth for the 21<sup>st</sup> Century* (1992年)、*A Matter of Time: Risk and Opportunity in the Nonschool Hours* (1992年)を始め、過去の出版物を多数引用している。また、*At the Threshold: The Developing Adolescent* (1990年)、米国議会技術評価局出版の三部作である *Adolescent Health* (1991年)、そして *Promoting the Health of Adolescents: New Directions for the Twenty-first Century* (1993年) など、評議会および財団の支援による調査の結果も引用している。その他、セミナーから本報告書に引用した評議会作成の資料として、*Life-Skills Training: Preventive Intervention for Young Adolescents* (1990年) および *School and Community Support Programs that Enhance Adolescent Health and Education* (1990年) がある。

カーネギー評議会の提案内容は、青年期、特に青年期初期に関する次の6つの基本コンセプトに従っている。

- 10歳から14歳という年齢は、人生において非常に重要な転換期である。したがって、この時期は、効果的な教育による育成、破壊的な行動の抑制、そして健康的な生活習慣の強化を目的とした介入に最適と言える。
- 教育と健康には切っても切れない関係がある。健康状態が良好であれば、学習効率も上がるが、不健康な状態は学習を妨げることになり、その後の人生の長きにわたって影響が現れる。それと同様に、勉学に前向きな場合には健康的な生活習慣の促進につながるが、一方で、勉学に問題を抱えている場合には、生活習慣までもが悪化してしまう。
- 青年期には、破壊的あるいは健康に悪影響を与えるような行動と、前向きで健康維持に役立つ行動が同時に現れる傾向がある。
- 青年期に問題行動を起こす若者の多くは、子供時代に共通の経験を原因として抱えている。1つは勉学について行けなかったこと、もうひとつは彼らを保護すべき大人からの強い影響力を持った持続的な指導がなかったことである。
- 問題行動の原因となる要因に対応できれば、予防的介入が成功する確率は高い。
- 青年が受ける影響の複雑さを考えると、彼らの健全な成長には、その経験形成に多大な影響力を持つ機関との相互協力が不可欠と考えられる。それら機関には、まず家族が考えられ、さらに、学校、保健医療機関、近隣住民、地域団体、マスメディアなどが含まれる。

「大いなる移行期」に関し、カーネギー青年育成評議会は、10年間にわたり懸命に活動を続けてきた。我々がその経験から学んだものは、事実の慎重な調査、偏見のない分析、主要セクターの協力による普及活動、そして長期にわたる持続的な努力の大切さである。とりわけ、すべての若者がより良い人生を送れるように、抜本的な改革を実現する努力を長期的観点から行うことが重要と考えられる。



## 夢が消えていく国

西暦 2054 年、  
災いが充満する世界。  
町を歩く人もいない、  
女性はだれも財布を持たない。

ゲームの名前はサバイバルナウ—  
安全という言葉ははるか昔のこと。  
子沢山の大家族、  
1人は生き長らえますようにという希望から。

ドラッグを蔑視する者はいない、  
それはすでに生活の一部だから。  
めまぐるしい進歩を遂げた世界で繰り返される争いの  
押しつぶされそうなストレスから我々を救ってくれるもの。

目がさめた—夢だったのだ。  
だけどメッセージは心に強く焼きついている。  
未来のことを真剣に考えなければ  
目標と夢を失ってしまうということ。

**JESSICA INGLIS、16 歳**

## 第 I 部

### 大いなる移行期

## 第1章

### 青年期初期：非常に重要な転換期

青年期は、人生において、次の点から最も魅力的で複雑な意味を持った移行期の一つと言える：幼児期に続いて急速な成長と変化が現れる時期；視野、自己発見、自立心が増していく時期；子供から大人へと変貌する時期。青年期の始まりは、生物学的、身体的、行動的、そして社会的な変化と関係が深く、ミドルスクールあるいはジュニアハイスクールに進級する時期とほぼ呼応する。この大きな変化の時期に起こる出来事が、その人物の人生形成に大きな影響を与え、ひいては我々の社会の未来にも関わってくる。

青年期というあわただしい時間の中で、若者は大きく成長し、喜びだけでなく、疑惑や混乱も経験する。仲間や家族との関係が新しい意味を持つようになる。若者の中には、将来の目標を立て、それに対してささやかな夢を抱くものもいる。一方、自分の将来について漠然としたイメージしか抱いてない若者でも、大人として成功するための道を求めて第一歩を踏み出すことになる。

世界中どこの社会でも、青年期は、思春期の生物学的な変化に呼応する形で始まっている。今日、技術的に最も進んだ国々では、100年前と比較して平均で2年も早く思春期が始まっているため、大人への移行期は10年あるいはそれ以上続くことになる。米国では、青年期の期間が昔より数年も長くなっているため、それをさらにいくつかの段階に分けて考えている。思春期の性的・心理的な芽生え、社会で新しい役割に挑戦し始める青年期初期は、大まかに10歳から14歳とされている。自主性が高まり試行錯誤を繰り返す青年期中期は、15歳から17歳の期間を指す。青年期後期は、教育的・社会的要因から大人に成りきれていない若者に使われる言葉で、その期間は18歳から20代にまでおよぶ。

#### 機会とリスクが混在する時期

多くの若者にとって、青年期という転換期は、時に苦悩や落胆を伴うものの、大きな機会に恵まれた胸躍る時期である。青年を集団として捉えた場合、気難しい、反抗的、無教育、「溢れ出すホルモン」に支配されている、といった社会通念は当てはまらない。青年期の成長に伴う要求を理解している家族との絆が確かな場合、多くの若者はこの時期を難なく過ごしていく。社会全体で見れば、ティーンエイジャーとその親あるいは他の大人たちとの関係は、一般に考えられているよりずっと平穏である。表面に現れるかどうかは別として、彼らが自主性や自己の確立を求めたときに、少数において大人たちとの間に衝突や反目が生じる。人生において大きな意味を持つ青年期を通じ、親たちの多くは、子供が自己意識を形成し、将来設計を描く場面に協力することで、彼らに重要な影響を与えている。さらに、仲間たちも、自尊心、自己認識、そして達成感といった点で、若者に良い影響を与える。親と精神的に距離がある、非常に仲が悪い、あるいは親が自分に対して無関心で

あるといった場合、仲間のサポートは特に重要となる。

こうした楽観的な見識にもかかわらず、青年たちは欲求や期待と同時にリスクや脅威にも向き合っており、しかもそれらは、数の上でも深刻さの面でも、ほんの一世代前とは比較にならない。健全な成長のために継続的に必要な要求を受け入れてもらえない環境で成長する子供たちが数百万人もいる。彼らは、親や他の大人たちから自分にとって必要な（そして自分がそれを欲していることを明言している）思いやりや関心を得ることさえできないでいる。社会環境の悪さが、痛々しいほど幼い子供をアルコールやタバコ、薬物の乱用、セックス、反社会的行為に駆り立てている。多くの子供が登校を拒否し、やがては退学していく。暴力的とも言える自己破壊的な行為が、貧富の差を問わず、10歳から18歳の年齢層に多数見受けられる。

青年期の問題の多くは、10歳から14歳の転換期を迎えたころから現れ始める。個人の発育と成長において得るものの多い大切な時期である青年期初期は、若者が勉学および健康の両面で、その生涯に影響を及ぼす行動パターンを確立し始める時期と重なる。同時に、幼い子供のように、特別な愛情と大人からの指導が必要な年齢でもある。こうした理由から、青年期初期は、健康的な生活習慣を長期的に形成する上で独特の意味を持った期間と言える。

米国には年齢10歳から14歳の青年が1900万人いる。その約20%は貧困ラインより下の生活を強いられており、30%が少数民族となっている。複雑な世界経済の中で勝ち残っていくには、こうした若者全員が十分な教育を受け、健康に成長していく必要がある。我々の社会にとっての課題は、20世紀末を迎えて大きな変化を遂げつつある社会や経済を前に、どのようにしてこの目標を達成するかである。この30年間の変化は、若者たちに物質的な豊かさや機会とを与えることになったが、同時に青年期の経験にも大きなストレスが伴うこととなった。こうしたストレスは、他の要因ともあいまって、若者たちを感情や行動に関連した病気に陥れている。

青年期初期の若者には、リスクを伴う行動を試そうとする傾向がある。そのため、破滅的な行動パターンが確立される前に、危険な行動による犠牲を食い止め、好ましい結果を得るために、早い段階での介入が大切となる。事実、青年期は、社会がその年齢層全体と合理的に接触できる最後の時期であり、建設的な働きかけが青年に与える影響は非常に大きい。

## 青年の健全な成長に必要なもの

青年はだれでも人間的な基本的要求を持っており、彼らが、礼儀正しく思いやり深い良識的な市民に成長するためには、こうした要求が満たされなければならない。彼らは、人から尊敬される方法、社会的価値のある集団への帰属意識の確立、そして社交術など有用な

スキルを習得することで個人としての価値を認識する方法を学ぶ必要がある。また、衝突が起こった場合の平和的解決法、倫理的行動の基盤、そして社会に用意されている支援体制の利用方法を理解していなければならない。できれば、青年期の間に、自分の将来に夢を持ち、成人後の社会で成功したいという前向きなビジョンを持ってくれることが望ましい。

しかし、現代社会では、さまざまな分野において競争力を持つことが良しとされており、それが青年たちに対しても同様に求められている。彼らには、頭の中で情報を整理し、問題解決を行う習慣を養い、世界の経済社会に参入できるだけの技術および分析能力を習得するほか、生涯を通じて刻々と変化する環境の中で状況を把握し、それに適応していく能力も必要とされている。さらに、さまざまな人種、宗教、文化グループが混在する多元的社会において、互いを尊敬し平和的に生きていく術も学ばなければならない。

子供時代は人生において最も重要な時期だと思います。人格形成は子供時代から始まるからです。子供時代は、自分は何者なのか、そして自分が何を成し得たいのかを考え始める時期です。また、人を信頼することを学び、社会生活における役割も習得される時期です。

残念なことに、この大切な時期を経験しない子供が大勢います。人として生産性を身につけないままでは、大人になってから問題を抱えることになります。

**SARAN ROSEN、16 歳**

## 青年期初期の若者は重大なリスクに直面している

### 健康上のリスク

- 青年期初期では、傷害が死因の第1位となっている。この時期の青年の死因で単独1位となっているのが、自動車事故による傷害である。<sup>1</sup>
- 10歳から14歳の銃器による殺人事件は、1985年から1992年で2倍以上に増加している（10万人あたり0.8%から1.9%）。黒人男性においては、銃器殺人の割合が、同じ期間で10万人あたり3.0%から8.4%まで増加している。<sup>2</sup>
- 1992年の暴行による犠牲者の割合は、12歳から15歳までで高い数値を示していた。この年齢層では、暴行による犠牲者の数が他のどの年齢層よりも多かった。<sup>3</sup>
- 10歳から16歳までの青年から代表標本を取って行った全国調査では、回答者の1/4が、前年に暴行または虐待を経験したと答えている。<sup>4</sup> 1992年には、児童虐待およびニグレクトの報告事例の約20%が10歳から13歳の青年期初期の若者に対するものであった。<sup>5</sup>
- アルコールやタバコの服用者は、違法薬物の使用者よりさらに多い。
- 21歳以下の人にアルコールを販売するのは違法であるにも関わらず、8年生の2/3がすでにアルコールを飲んだことがあると回答し、1/4については現在も飲酒を続けている。8年生の28%が酩酊した経験があると報告している。<sup>6</sup>
- 8年生、つまり13歳から14歳において、現在喫煙を行っている（タバコの種類に関わらず過去30日以内に喫煙した）割合は、1991年の14.3%から1994年は18.6%へと30%増加した。<sup>7</sup>
- 8年生のマリファナ使用者の割合は、1991年の6.2%から1994年の13.0%へと2倍以上の増加を見せている。<sup>8</sup>
- この30年間で、性交渉を初めて経験する年齢が低下している。1970年代初頭と比較して、1988年には、青年期の男女が15歳から20歳で初めて性交渉を体験する割合が増加している。1988年には、女の子の27%、男の子の33%が15歳の誕生日までに性交渉を経験していた。<sup>9</sup>
- 15歳以下での出産数は多くないものの、この年齢層での出産割合は過去最高となっている。米国における15歳未満の妊娠率は、1980年から1988年で4.1%増加し、ど

の年齢層よりも高い増加割合となっている。<sup>10</sup>

- 現在の研究では、青年期におけるうつ病および躁うつは、男の子より女の子のほうが多いことがわかっている。14歳から15歳までのうつ病発生率は、女の子が男の子の2倍で、性別による違いは大人になってからも変わらない。
- 1980年から1992年で、青年期初期の自殺割合は、120%増加し、特に若い黒人男性（300%）および若い白人女性（233%）において劇的な増加を見せている。10歳から14歳のアメリカ・インディアンの自殺率は、人種全体での10 - 14歳の自殺率の4倍となっている。<sup>11</sup>

## 教育上のリスク

- 13歳の生徒の科学、数学、および作文の平均習得度は、1970年と比較して1992年ではわずかに向上している。ただし、このように習得度が向上しても、世界経済において要求されるハイレベルなスキルについていくにはまだ不十分である。<sup>12</sup>
- 1994年に、読解科目で習得レベル以上の点数を達成できた8年生の生徒はわずか28%であった。上級レベル以上を達成したのは2%であった。<sup>13</sup>
- 1990年に、1988年の8年生のうち7%が中退した（中退時、生徒のほとんどが15歳または16歳）。<sup>14</sup>最上級生になるまでに（1992年）、この8年生クラスの12%が中退した。<sup>15</sup>中退の割合は、生徒の人種／民族によって異なる：白人（9.4%）；黒人（14.5%）；ヒスパニック系（18.3%）；アジア／太平洋諸島民族（7.0%）；アメリカ・インディアン（25.4%）。<sup>16</sup>

米国で青年の人生形成に最も大きな影響を与える集団として、家庭や学校の他に、若者向けのサービスを提供する機関や保健医療団体があるが、最近ではメディアの影響が大きくなってきている。カーネギー評議会は、青年に対して大きな影響力を持つこれら5種類の重要な機関に対し、青年の健康な成長に不可欠な要素を満たし、彼らが高度に技術開発の進んだ民主社会の要求に応えられる人物になるための指導を強く求めている。今までこうした機関は各々の基本的責務のみを果たしてきた。しかし今こそ各々の役割を再認識し、青年を社会的にサポートする体制を互いに強化しなければならない。

## 包括的、全面的アプローチ

現在、青年期初期の若者に対して行われている介入は、薬物乱用、非行、ティーンエージャーの妊娠など、特定の問題行動をターゲットとしたものが多い。このように、的を絞っ

た介入や行動タイプ別の介入は有効性が高い一方で、1人の若者が起こす問題行動は1つとは限らない、それらの問題行動は子供時代あるいは勉学上の経験に共通の原因を抱えている、という2つの調査結果を十分に反映していない。

カーネギー評議会が提案する対策は、青年を最初に危険性の高い行動あるいは問題行動に駆り立てる潜在的要因に直接働きかけるというものである。この提案の特徴は、包括的かつ全面的で、さらに予防効果をも備えていることである。対策の焦点は、今や当たり前のものではなくなってしまった、かつて家族や地域社会の中で行われた青年を社会的に支える体制を修復、強化することにある。この包括的なアプローチでは、起こってしまった問題行動にのみ着眼するのではなく、それらに共通する過去の経験にも注目する。また、大人への移行期である青年期に本来提供されるべきサポート、すなわち教育や青年期初期の若者に健康的な生活習慣を身に付けたいと考えさせること；対人関係や意思決定に役立つスキルを養うことで、青年に危険性の高い行為ではなく別の何かを選択させること；発展的な人生を構築する理由付けと手段とを提供することなどを重視する。

## カーネギー評議会の提言

青年の健康的な発育と成長を可能にするには、若者に多大な影響を与える集団すべてが協力して責任を負う必要がある。今日および次の世紀には、1つの団体だけで青年期から成人への移行期にある若者を支えることは不可能である。家族、学校、保健医療機関、地域団体、そしてメディアが各々の責務を全うしながら、協力して若い世代を人生の成功へと導くことが必要となる。

カーネギー評議会は、まず家族に対し、青年期を迎えた子供と家庭生活や学校生活、それ以外の場面で時間を共有するよう求めている。学校に対しては、青年期初期の若者の成長に必要な特有の要求を理解し、それに見合った教育を行うようお願いしたい。保健医療機関については、青年期に生涯を通じての健康的な生活習慣を取得させるためのより良い方法を考えてもらいたい。地域団体については、他の団体と協力体制を敷き、青年が学校以外で安全かつ有意義に過ごせる場所やプログラムの提供を要請する。メディアにおいては、その幅広い影響力を若者の生活を前向きなものへと変えることに活用して欲しい。

つまり、若者の育成に関わる団体は、大人への入り口に立つ若者を温かく見守り支える社会基盤、すなわち、彼らが逆境の中でも生産的で充実した成人期を迎えるために、難しい移行期の数年を通じて青年を支持するためのインフラ構築に最善を尽くすべきである。

## 共通する過去の原因を探る

米国は、個人主義の伝統が根強い多民族・多元的な大型国家である。これらは米国にとつ



てすばらしい財産であると同時に、米国人が複雑な社会問題に対して共通の理解を示し、その問題を誰もが納得するような方法で解決することを困難にする原因にもなっている。社会の基本集団、すなわち、家族、学校、教会、若者のための団体、保健健康機関、そしてメディアが、高等教育機関、学術団体、政府といった影響力のある団体の協力を得た上で、若者の成長に必要な要求を満たす方法はあるのか？青年にふさわしい価値観や行動、そして彼らを支援するためにこれらの社会集団が取るべき措置についてコンセンサスを得ることは決して簡単なことではない。しかし、危機に直面しているのが若者の人生だけでなく社会全体の未来もが危険にさらされている以上、我々はこの難題に立ち向かうほかない。

## 第2章

# 新しい環境における古い生物学

思春期の生物学的変化は、脳が下垂体に性ホルモンの分泌を促すホルモンを生成するように命令することが引き金となって起こる。これらのホルモンは、外部の要因と相互作用し、脳を含めた体中の組織に大きな影響を与える。こうしたホルモンの影響が、体の急激な成長と同時に、社会的、感情的、性的行動、そして認知力の顕著な変化として現れるのである。

これらは、青年期の基本的変化として、本質的に昔から変わっていない。昔と今とで大きく異なるのは、この一連の出来事に対する社会的背景である。急速な工業化、都市化、技術進歩、地理的な移動性の向上、文化の歪曲が、成長期の子供たちと家庭生活を取り巻く環境を大きく変えることになった。この歴史的な変化の早さが、我々が子供と青年の健康的な成長に必要な基本的要件を理解し、社会集団によるこうした要件への対応を困難にしている。その結果、多くの青年とその家族が本来あるべき姿を見失ってしまったのだ。

## 青年の成長と現代社会との関係

ここ数十年間に起こった社会変化が青年の成長に大きな影響を与えている。

- 家族の変化。親類や近隣住民とのネットワークが損なわれ、離婚がめずらしいことではなくなってきた。現在では、アメリカ人の子供の半数強が子供時代から青年期の一時期を片親家庭で過ごすと考えられる。片親あるいは両親が働いているか、外出して家にいないため、青年が自分を気遣ってくれる大人と過ごす時間は昔より少なくなっている。彼らにとっては、両親と過ごす時間よりも、同年代の仲間とだけ過ごしたり、テレビを見たりして過ごす時間のほうが長い。1988年の調査では、8年生の約27%が、放課後家に帰ってから2時間以上を1人で過ごしていることがわかっていてる。
- 仕事内容の変化。経済の再編により知識集約型への移行、マーケットのグローバル化が進んだことで、高卒者の多くが、社会的地位が低く将来性の薄い仕事に甘んじることになった。大学教育を受けた若者と高校までの教育しか受けていない若者との収入格差が広がり、多くの青年とその親が、将来に対する希望と勤労意欲を失いつつある。貧困層においては、物質的な格差と仕事の不安定さゆえに、若者が将来を悲観する状況になっている。
- 若年者の生殖能力と大人としての役割とのギャップ。思春期の発現は100年前と比べて平均で2年も早く現れるようになった一方で、結婚年齢や大人として完全に認

められる時期はさらに遅くなっている。事実、20世紀後半においては、性的な成熟期と一人前の成人として役割と責任が求められる時期とに、これまでにない大きな隔たりが生まれている。言うまでもなく、この長い空白期間が若者とその親との心配の種になっている。

- **メディアの影響。**パソコンと並び、テレビ、ビデオ、そして音楽番組が、子供と青年の生活に与える影響は拡大の一途を辿っている。テレビを見る時間は青年期中期までにピークに達するため、若者にとっては、担当教師と過ごすよりもテレビの前に座っている時間の方が長いということになる。テレビは、若者が、自分の将来、価値観、他人との関係について抱いている期待と不安に多大な影響を及ぼす。
- **多様な民族性。**米国は、世界を代表する多民族国家に成長した。現在、アメリカ人青年の1/3が北ヨーロッパ人以外を祖先に持ち、宗教、民族、国籍も多岐にわたっている。都市部の公立学校では、不利な境遇にある少数民族が多数派となっている。2050年までに、アメリカ人の50%近くがアフリカ系アメリカ人、アメリカ・インディアン、アジア/太平洋諸国民族、ラテンアメリカ/ヒスパニック系になると予想されている。民族の多様性を尊重しながら平和的に生きる術を学ぶことが21世紀の若者にとっての大きな課題となるだろう。

青年とその家族のだれもが、社会のこうした複雑な変化による影響を受けている。いかなる社会集団もその影響を免れることはなく、裕福な家族もその例外ではない。特に、問題なのが青年期初期の若者による行動習慣の悪化傾向である。今日10歳から14歳の子供が、かつては青年期中期から青年期後期の若者に見られた非常に危険な行動を起こす確率が高くなっている。そうすると、若いうちに成功のチャンスを失ってしまう、障害を抱えてしまう、そして最悪の場合は死亡するといった結末に至ることになる。

## 予防可能な問題が及ぼす経済的影響

青年期の妊娠および薬物乱用は、その発生だけが問題なのではない。こうした行為は、将来の長きにわたって影響を及ぼすが、問題行動の兆候は青年期以前にすでに現れている。下記はこうした問題を予防することの重要性を経済的な面から説明したものである。

### 中退

- 学校を続けることは、青年にとって将来の経済基盤を確保する上で最も重要な行動である。1992年の高校卒業者の年収は、高校中退者のそれより6,000ドル多かった。<sup>1</sup>
- 大学に行けば、収入はさらに増加する。1992年の大卒者の平均年収が32,629ドルであったのに対し、高卒者の平均年収は、18,737ドルであった。博士号を取得すると、年収は、大卒者の平均年収よりさらに40,000ドルもアップする。<sup>1</sup>
- 性別も収入に影響する。高卒男性の平均月収は、高卒女性の2倍にもなっており、女性の教育の重要性が浮き彫りになっている。<sup>2</sup>

### 出産

- 10代で母親になる女性は、20代以降に出産する女性よりも将来的に貧しい生活を送る傾向が強い。10代で出産する女性では、20代30代で貧しい生活を強いられる女性が28%にのぼるが、青年期を過ぎて出産した女性で20代30代に貧困を経験するのはわずか7%である。<sup>3</sup>
- 1992年、連邦政府は、要扶養児童家庭扶助、メディケイド、青年期に家庭を持ち始めた人々への生活保護に約340億ドルを費やした。<sup>4</sup>
- 家族計画の指導は、納税者の負担を減らすひとつの方法である。家族計画の指導に公金を投じることで、医療、福祉、栄養プログラムへの出費が減り、平均で4.40ドルの税金節約になる。<sup>5</sup>

### 薬物使用・乱用

- 薬物乱用に対する治療費、若年者の死亡および日常生活への支障による生産性の低下、犯罪対策、所有物破壊など、薬物乱用に伴う損害に対し米国が支払うコストは、年間2380億ドルを超えている。<sup>6</sup>
- 毎年、100万人以上の若者が喫煙習慣を開始しており、生涯を通じての疾病予防費と